プラトンおよびプロティノスにおける《ἥλιοειδής》概念についての覚書

――ゲーテのプロティノス受用との関連から――*

加藤好光

序

本論の主題は、“ἡλιοειδής”という言葉の意味である。それに先立って、まず、いかなる経路から論者がこの問題に行き当たったのかを述べておきたい。

一八〇五年夏、ゲーテは、当時の著名な古典学者ヴォルフ（Friedrich August Wolf）との交友を通じて、プロティノスの書『美について』の最終章にこの言葉を見出し、深い関心を抱いた。そしてかれは、ヴォルフが所蔵する、フィチーノによるラテン語訳の『エネアデス』から該等箇所“Neque vero oculus unquam videret solem, nisi factus solaris esset”を手持ちの帳面に書き留めた。この帳面はこんにちワイマールのゲーテ・シラー・アルヒーフに保存されているが、それをみると、ゲーテの筆跡による手稿には“solaris”に下線が引かれ、また引用の末尾には、同じくゲーテの筆跡で、原語の“ἡλιοειδής”が原典どおりの重アクセントで書き添えられている。その後、同じ帳面にゲーテは、この引用をもとにつぎのような詩を作成した。

眼が太陽のようでなかったならば、
太陽を見ることは決してないであろう。
われらのうちに神の力が宿っていなければ
どうして神々しいものがわれらを魅了することがあろうか
(Wär' nicht das Auge sonnenhaft
Die Sonne würde es nie erblicken;
Wär' nicht in uns des Gottes eigne Kraft,
Wie könnt uns göttliches entzücken)

この詩は、その後、若干の修正の後、一八〇七年ないしその翌年に書かれた『色彩論』教示篇の序文に「古代人のある神秘家の言葉」(MA 10 20) として載録された。この四行詩のもとになった箇所でプロティノスはつぎのように述べている。

眼が ἡλιοειδής になっていなければ、眼は太陽を見ることなどできないであろう、また美しくならねば魂も美を見ることなどできない。だから神を見、美を見たいならば、その者はまず完全に θεοειδής となり、完全に美しくならねばならない。

(οὐ γὰρ ἂν πώποτε εἶδεν ὀφθαλμὸς ἥλιον ἡλιοειδὴς μὴ γεγενημένος, οὐδὲ τὸ καλὸν ἂν ἴδοι ψυχὴ μὴ καλὴ γενομένη. γενέσθω δὴ πρῶτον θεοειδὴς πᾶς καὶ καλὸς πᾶς, εἰ μέλλει θεᾶσασθαι θεόν τε καὶ καλόν. (I.6,9,30-34))

右の文章と、ゲーテの四行詩を置く『色彩論』序文の文脈とを引き比べると、そこには見過ごすことのできない意味のズレがある。もっとも、このこと自体は、本考察の原因となった事態であり、本論の検証の対象とはしない。ただし、この不一致を明確にするための必須の条件は、プロティノスが右の引用箇所において使用している“ἡλιο-ειδής”の語義を明らかにすることであるのは論を俟たず、本論の第二節ではそれが試みられる。

周知のように、“ἡλιοειδής”はプラトンに由来する言葉であり、プロティノスはプラトンからこの言葉を借用している。そこで“ἡλιοειδής”という言葉をプラトンがどのような意味で使っているかを押さえておく必要が生ずる。これを本論第一節で行う。そこから明らかになるのは、この言葉の意味がプラトンとプロティノスの間でも異なっている、ということである。

一八〇五年のゲーテのプロティノス講読がヴォルフの仲介によるものであることはすでに指摘したとおりである。プロティノスにたいするこの碩学の徹底して否定的な評価を顧慮するとき、われわれは、かれが、この言葉がプラトンの『国家』に淵源することも併せてゲーテに指摘したと想定せざるをえない。さらに、そもそもゲーテがプロティノスに関心をもったのは、一八〇五年五月に出た、神学者クロイツァーによるプロティノスの書『自然、観照、一者について』のドイツ語訳を読んだからであるが、その翻訳に付けられたクロイツァーの註のひとつには、『国家』第六巻 509a1 の“ἡλιοειδῆ”が引用されているのである。この二点からわれわれは、ゲーテがプラトンの“ἡλιο-ειδής”を知っていたと考えることができる。ここで厄介な問題が生ずる。それは、ゲーテの“sonnenhaft”が、その語義に関する限り、プロティノスの“ἡλιοειδής”とは明らかに異なっているのみならず、かえってプラトンのそれに符合する契機をもっている、ということである。

では、そもそも、なぜゲーテは、プラトンの、ではなく、ことさらプロティノスの“ἡλιοειδής”に関心を示したのか。以下の叙述は、この問題をそれとして提示することを目的として書かれたものである。

一

すでに序において言及したように、“ἡλιοειδής” はもとプラトンの概念であった。そこで、プラトンにおいて形容接尾辞 -ειδής 乃至 -ωδής[1] がどのような意味を持っているかを検証すると、そこにふたつの意味契機を認めることができる。第一にこの接尾辞は、それが接続する概念（甲）と、この接尾辞を持つ形容詞によって特徴づけられる対象（乙）の類似性を表現する。『ティマイオス』74a4 で、「骨」（乙）が“λιθοειδής”、即ち「石（λίθος）」（甲）のようだ、と言われるのがこの例である。[2] 直截で、具象的な比喩によって指示対象の特定の特徴を強調することがこの意味契機の核である。ホメロスにおいてすでに類例が認められるところから、これが接尾辞 -ειδής／-ωδής の持つもっとも古い意味契機であると言えよう。[3] この意味契機が実際の文脈で持つ意味の幅は、およそ接尾辞 -ειδής の語根である “εἶδος” が「かたち」という語義において持つ意味の広さに呼応すると思われる。

第二の意味契機は、哲学的な思索のなかで培われてきたものである。ある一定の観点から、対象乙の実在、本性、機能等が甲概念を原因としていると認識される場合にこの接尾辞が使用される場合がある。この場合、語幹の “εἶδος” は、「属」という意味で捉えられている。ここでいう「属」とは、認識上、原因概念としての甲が包摂、統括、支配する或る全体である。後述するように、“ἡλιοειδής” における接尾辞 -ειδής はこの意味を核としている。

接尾辞 -ειδής／-ωδής にはさらにこの第二の意味契機から派生した副次的な意味契機がある。それは「指同性・傾向性」という意味契機で、それを副次的と言うのは、それが “εἶδος” という言葉の語義からは直接導出されないからである。この意味契機の表現するところは、対象（乙）の原因（甲）に対する関係としての指同性ないし傾向性であり、第二の意味契機と表裏の関係にあると言える。もっとも、これはあくまで副次的派生的なものであるから、

これまで見てきたふたつの意味契機のいずれかと組みで使用されうる。“ὑλοειδής”という概念においてもわれわれはこのような意味契機の重複を認めることができるが、それに立ち入る前に、わかりやすい例を挙げ、接尾辞 -ειδής／-ωδής がいかに多義性を持ちうるかを確認しておこう。たとえば『ファイドン』にはつぎのような表現が見出される。

魂は σωματοειδής なものによって捕らえられた状態にあり、その σωματοειδής なものとは、肉体との交わりや交渉が、恒常的な共存やあまたの放蕩を通じて魂に植えつけたものではないのか。

([…] διειλημμένην [scil. τὴν ψυχήν] … ὑπὸ τοῦ σωματοειδοῦς, ὃ αὐτῇ ἡ ὁμιλία τε καὶ συνουσία τοῦ σώματος διὰ τὸ ἀεὶ συνεῖναι καὶ διὰ τὴν πολλὴν μελέτην ἐνεποίησε σύμφυτον; 81c4-6)

生前、肉体との交渉を持ちすぎたことによって魂に植えつけられ、肉体の死後も魂を捕え続けるとされるもの、すなわち“τὸ σωματοειδές”の意味するところは、「肉体に似たもの」、「身体のかたちをしたもの」――それを得て魂は肉体の死後、幽霊となる――だけではない。第一の意味には「指向性・傾向性」、つまりここでは此岸にたいする執着という意味が加味されているのである。これを方向で示すならば、魂の下方指向ということになるであろう。対話相手ケベスの短い答えのあとでソクラテスが語る言葉は、まさにこれを言っている。「そして、それ［σωματο-ειδής なもの］は、友よ、まさに重荷であると考えねばならないのだ。重くて、γεώδης であり、それのみか可視的でもあるのだ、と（Ἐμβιθὲς δέ γε, ὦ φίλε, τοῦτο οἰεσθαι χρὴ εἶναι καὶ βαρὺ καὶ γεῶδες καὶ ὁρατόν）」(81c8-9)

知を厭う者、すなわちプラトン言うところの“μισόσοφος”（『国家』第五巻 456a4）の魂は、死後も重く、地

(γῆ)、つまり下方への指向性を持つ（γεώδης）。このような魂をソクラテスがここで「可視的」というわけは、テクストを読み進んでゆくうちに明らかになる。そのような魂は死後も叡智界に戻ることができず、「影のような幻（σκιοειδῆ φαντάσματα）」(81c11-d2)、つまり幽霊として墓地のまわりをさまよい歩かねばならないのである。先に言及された「σωματοειδής なもの」には、ここからも窺い知れるように二重の意味が込められている。第一にそれは、生前の長きに亘った肉体との交わりゆえにいつまでもうかばれない魂が幽霊になるということであり、この意味では、魂自身が肉体の「すがた（εἶδος）」をとるということになる。また第二に、このような魂がうかばれないのは、肉体的なもの、此岸的なものにたいする「傾向性」に死後も捕えられているからなのである。

ここで幽霊を持ち出したのは、自らの死刑執行を待ちながら、集う若者らと最後の哲学的対話をするソクラテスの巧妙な比喩である。そしてこの比喩は、接尾辞 -ειδής の持つ意味契機の多様性に基づいている。若者らを哲学へと誘い導くため、ソクラテスは哲学的霊魂論に物語的な要素を加味しているのである。「生きているうちに此岸的なことばかりに関わりあっていると君らの魂は肉体のかたちをとって、死後もうかばれずに地上をさまよい歩かねばならないことになる」、と。

このように“σωματοειδής”には、「かたち」という接尾辞本来の意味契機が、「傾向性・指向性」という（新しい）意味契機と併用ないし結合されているが、それにたいして、“γεώδης”という言葉においては、第一の意味契機「…のような」はすでに失われている。この言葉は、「土のような」、「土のかたちをした」、もしくは「土に似た性質の」と解されるべきではない。または、接尾辞 -ωδής の語源上の意味を汲んで「土臭い」とも訳せない。“γεώδης”は明確に、上方指向をもつ哲学者の魂と対をなす厭学者の魂の下方指向を表現しているのであるから。

右に挙げた例とは同一ではないが、『国家』第六巻に見出される“ἡλιοειδής”にも類似の多義性、すなわち意味契機の重複が認められる。ここで接尾辞 -ειδής がもつ中心的な意味契機は、語幹の“εἶδος”を「属」の意味

とするもの（第二の意味契機）であり、これに、眼の太陽にたいする「指向性・傾向性」という副次的な意味契機が加味されている。『国家』の該等箇所でプラトンは、眼が「感覚に関する器官の内でもっとも ἡλιοειδής」（508b 3-4）であるという見解を導き出すために、物を見るはたらきと物が見られる可能性とを結び付ける貴い絆として光を規定したうえで、ソクラテスとグラウコンにつぎのような問答をさせている。

「さて、君だったら、天上の神々のなかでだれを、そのことを司る原因として挙げる（ἔχεις αἰτιάσασθαι）だろうか。つまり、それが発する光がわれわれの視覚をしてできるだけよく見るようにし、また見られるものができるだけよく見られるようにしている、と」

「もちろん、あなたや他の人たちと同じ神を挙げますよ。[…] お尋ねになっているのが太陽だというとは明白ですからね」（508a4-8）

さらに、ここでの眼と同じように、少し後の箇所では、太陽を原因として、これにその存在を負い、太陽によって支配されていると認識されるもの、すなわち「光」と「視覚」もいわば「同属」の概念として、「太陽」という「属（εἶδος）」に含まれるという意味で“ἡλιοειδής”（509a1）と言われ、また、「真実」と「知識（ἐπιστήμη）」が「善（τὸ ἀγαθόν）」を原因とするとして“ἀγαθοειδής”（509a3）と賓辞されるのも同様の理由からである。（508b6-509b10）

視覚の太陽への本性的な指向性が言及されている『国家』第六巻 508a9 に続いて、「視覚」と、視覚を内に宿す「眼」は、しかし、それ自身太陽であるわけではないと語られ（508a11 - b1） ―― この認識は接尾辞 -ειδής の第一の意味契機と表裏を成す ――、そして、眼は感覚器官中もっとも“ἡλιοειδής”なものであるという言表の直

後では、眼が「見る」能力、すなわち視力を太陽から注ぎ込まれるようにして授けられている（第二の意味契機）、とも説かれている（508b6-7）[4]。さらに、同じ文脈では、視覚（ὄψις）が太陽にたいしてもつ本性上の傾向性にも触れられている（… πέφυκεν ὄψις πρὸς τοῦτον τὸν θεόν[i.e. τὸν ἥλιον] 508a9）。以上を総合すると、眼という感覚器官が "ἡλιοειδής" と言われるのは、眼はそれ自体太陽であるわけではないが、その存在を太陽に負っており、またこの帰属性ゆえにその能力が原因者である太陽への指向性を持つからである。

二

プロティノスは "ἡλιοειδής" という言葉でなにを言おうとしたのか。冒頭に引用したかれの言葉に戻ろう。

プロティノスの処女作『美について』は全体にプラトンの影響を色濃く示している。論は全体として『饗宴』における美の階梯論に準拠して展開されている。これは、感覚的美の直感から道徳的精神的美を経て、美それ自体の観照にいたる哲学的恋愛論である（Symp. 210a-212a）。序において引用した箇所でプロティノスが問題としているのは、神性ないし叡知的美（「大いなる美」I.6,9,25）の観照はいかにして可能か、である。プロティノスの説くところによれば、観照者は、観照すべきものに能うことが必要であるとされる。その際、観照者はそれを自己の外に見るのではなく、内的に観照しなくてはならない。つまり、観照者は自身の内に神々しく美しい観照物を持たねばならないのである。これを換言すれば、観照者自身がそのようなものとならねばならない、ということにほかならない。われわれの引用に先立つ箇所でプロティノスはつぎのように、感性的視覚とは「異なった視覚」（I.6.8,25-26）、つまり精神の眼による高次の観照の条件を述べている。

劣悪さゆえにくもった眼、未だ清められておらず、脆弱で、臆病さから燦然と輝くものを直視できない眼が観もの（θέα）に向かうとき、たとえ他の人が、実際に在って見ることができるはずのものを指し示してくれたとしても、何も見ない。(I.6,9,25-30)

精神ないし心の眼による視と、感性的な視とは、しかしながら、そのしくみにおいて異なるものではなく、類比的に捉えられる。引用に続く、「というのも、[ひとは] 見るもの [眼] をあらかじめ見られるものとあらかじめ同類とし、同等としたうえで（συγγενὲς καὶ ὅμοιον ποιησάμενον）観ものに向かわねばならないのであるから」という一文は、――“θέα”（観もの）に定冠詞が付けられているにもかかわらず ―― 高次の観照に限定されたものではなく、精神的と身体的を問わず、「見る」こと一般についての言及であり、その直後に続く、「眼が ἡλιοειδὲς になっていなければ、眼は太陽を見ることなどできないであろう」への橋渡しとなっている。

感性的知覚の比喩による精神的観照の説明、ならびに「太陽を見る」という具体例から、ここに、プラトンの『国家』第七巻の「洞窟の比喩」(514a-517a) を再認することに何ら困難はない。ただし、プラトンはそこで “ἡλιο-ειδὲς” という言葉をつかっていない。この言葉の「プロティノス的意味」を見極めるために、一度、プラトンが右の箇所で述べていることを概観しておこう。―― 生まれてこのかた洞窟の奥にいる者は、その背後にある火が洞窟の壁に投影する物の影をその物自体と思い込んでいる。そしてかれが振り返って、いままで影絵を洞窟の壁に投げ掛けていた火の輝きを目にすると、目が眩んでしまい、いままで影しか見ることのなかった対象の実体を認識するのにしばらく時間を必要とする。さらに、洞窟の外に出て、洞窟の中で見たものすべての原因である太陽を目にするときはなおさら、かれは陽光が眼にもたらす痛みに堪えなければならない。太陽を直視するには慣れ（συνήθεια）が必要なのである (516a5)。

この「洞窟の比喩」と同様、序に掲げたプロティノスの引用においても眼の「明順応」の比喩がなされている。即ち、プロティノスの言う“ἡλιοειδής”とは、眼が太陽をも直視しうるほどに明順応した状態を意味するのである。眼は、太陽をしっかりと捉えることができるまで明順応して、太陽と「同類」ないし「同等」なもの（συγγενὲς καὶ ὅμοιον）となり、“ἡλιοειδής”となる。ここで問題となる眼と太陽の同等性ないし類似性は論理的な要請というより、とりあえずは経験的主観的確信として理解されるべきであろう。またこの「同等性」は始めから眼に備わっているものではなく、ある意味でイデアの直観とも比較されるほど困難な修練を通じて初めて習得されるものなのである。すなわち、眼の「太陽性」、もしくは眼と太陽の「同類性」といっても ― すくなくともこの言葉の置かれた文脈から判断する限り ― 視覚器官としての眼の発生ないし機能の原因として太陽が考えられているわけではない。この点でプロティノスの“ἡλιοειδής”はプラトンのそれと異なっている。見るもの（眼）は見られるもの（太陽）と端的に“συγγενὲς καὶ ὅμοιον”であるのではなく、太陽を見る者がそれをそのようになす（ποιήσαμενον）のである。その意味で、眼は、天上の太陽を直視するにあたっては、「陽光に完全に順応した状態になっていること（ἡλιοειδὴς γεγενημένος）」が不可欠なのである。

右の説明からは、しかし、プロティノスが視覚の成立条件としてなぜ「同等性」や「同類性」という概念を持ち出してきたのかは未だ明らかではない。このような概念は、神的なものの観照における魂の浄化もしくは神化の要請からの方がよほど分かりやすい。というのも、太陽を見る眼が太陽と同等・同類であるという考えはそれだけ提示されても何が言いたいのか不明瞭なままであるが、神性を認識するためには神々しくなるまで自己を陶冶しなければならない、という言説であれば、それを許容するか否かは別問題として、それとして容易に理解されるであろうから。しかし、プロティノスは前者の比喩で後者を説明しているのである。（なお、すでに指摘したように、プラトンは「洞窟の比喩」のなかでは“ἡλιοειδής”という言葉を使用してないし、眼と太陽の同等性という概念も提示していな

い。)

プロティノスは、眼と太陽との「同等性」の比喩の方が、それによって説明されるべき魂の陶冶よりも容易に理解できるものだと考えていたのだろうか。また、プロティノスは、『国家』第六巻にみられるプラトンの説明と第七巻の「洞窟の比喩」を重ね合わせて、"ἡλιοειδής" という言葉に、太陽にたいする眼の「順応」という意味を持たせたのであろうが、どうして接尾辞 -ειδής はこのような「順応性」という意味契機を持ちうるのか、はたまた、眼の太陽にたいする「順応」をどうして眼と太陽の「同等・同類」と捉えうるのか、これらはいまだ不明のまま問題として残されている。

私見によれば、右の疑問にひとつの解答を与える見解をアリストテレスが『霊魂論』において述べている。アリストテレスは、「感覚されるものと感覚とは、それらが何であるかはそれぞれ異なっているが、両者の現実態は同じひとつのものである(ἡ δὲ τοῦ αἰσθητοῦ ἐνέργεια καὶ τῆς αἰσθήσεως ἡ αὐτὴ μέν ἐστι καὶ μία, τὸ δ' εἶναι οὐ τὸ αὐτὸ αὐταῖς 425b26-27)」と述べ[5]、また、感覚器官を、感覚対象を「受け容れるもの(δεκτικόν)」(425b23)とよんでいる。むろん感覚器官はそれが知覚する対象を質料ともども受容するのではなく、対象の「形相(εἶδος)」のみを受け容れるのである。いわく、「感覚は感覚対象の形相を、それの質料を抜きにして受け入れることのできるものである(… ἡ μὲν αἴσθησίς ἐστι τὸ δεκτικὸν τῶν αἰσθητῶν εἰδῶν ἄνευ τῆς ὕλης」(424a17-19)。これに基づくと、感覚作用の現実において感覚対象と感覚作用の間を橋渡しして、両者の間の同一性をなすものは、感覚対象の「形相」にほかならない。

右の点を顧慮すると、史実上はどうあれ、思想上はアカデミーのみならずリセの徒でもあったプロティノスの"ἡλιοειδής"についてつぎのように言うことができるのではないか。すなわち、燦然と輝く陽光に順応して、太陽を見ることができるようになるということは、眼が太陽の「形相(εἶδος)」を受け容れられるようになること、

つまり“ἡλιοειδής”になることである、と。さらに、「同等性」にかんしてはつぎのように説明できるであろう。太陽を直視するさいに感覚器官である眼を通じて、感覚作用である「視覚」と感覚の対象である「太陽」は太陽の「形相」を共有し、そのかぎりで「同一」になり、それによって感覚の現実（ἐνέργεια）における「見る眼」と「見られる太陽」の「同等性」ないし「同類性」が ―― 経験的確信の段階を超えた論証のレヴェルにおいても ―― 成立するのである、と。

これに関連してふたつのことに言及する。まず第一に、アリストテレス自身は感覚器官を、その知覚対象に接尾辞 -ειδής をつけた形容詞で形容してその特性を言い表しているわけではない。そして第二に、プロティノスにおいてもすべての可能な知覚対象が、その名辞に接尾辞 -ειδής をつけて形容詞化され、感覚器官の特性を表示するために用いられるわけではない。

はじめに指摘した事実にもかかわらず、プロティノスが眼を“ἡλιοειδής”と言うさい、アリストテレスの『霊魂論』に依拠していると考えられるのは、プロティノスが『自然、観照、一者について』の最終章で、「知性（νοῦς）」を「或る種の視覚であり、現に見ている視覚なのであるから、現に活動している能力」と性格づけた上で、つぎのような言説を提示しているからである。

> […] 知性は善を必要とするが、善は知性を必要とはしない […]。それゆえ、知性は善を得ると善に似たものともなり、善によって完成されもするのであって、それは、善から知性にやっていた形相が、知性を善に似たものとするからである。（Ⅲ.8,11,15-19）[6]

ここで「善に似たもの」と邦訳されている言葉は“ἀγαθοειδής”である。ヌースが叡知界に君臨する太陽であ

る善に満たされて“ἀγαθοειδής”となることは、眼が物質界の太陽を直視することによって“ἡλιοειδής”となることの類例であるから、右の引用の「知性」と「善」をおのおの「眼」と「太陽」に置きかえることは可能であるし、また眼の「太陽性」を考察する際にはそうされるべきであろう。

右の引用が『自然、観照、一者について』からのものであることは、ゲーテのプロティノス受用を検証するうえで極めて重要である。すでに述べたように、論者は、ゲーテがクロイツァーによってドイツ語に訳されたこの書を読んで関心を覚え、その上でヴォルフの教示を受けて『美について』第九章の“ἡλιοειδής”を知るに及んだのではないかと考える。それは、ゲーテの「眼の太陽性」の思想に関する論攷において取り上げるべき問題であるから、ここでは指摘に止める。

最高度に明順応することによって眼は“ἡλιοειδής”となり、精神の眼であるヌースも善の観照を通じて善に満たされ、善の形相を受け容れて“ἀγαθοειδής”となる。ここで、先に指摘した第二点が問題となる。眼は、たとえば、「犬」を見ると“κυνοειδής”となるのか。アリストテレスの感覚論に依拠しながら、プロティノスの語法を無批判に敷衍するならば確かに犬を見る眼は“κυνοειδής”と形容されてしかるべきである。しかし、プロティノスにこのような語法はない。それは、この場合の視覚対象である「犬」が、眼の視覚機能にとっても、眼の実在にとっても、何の意味も持ちえないからである。つまり、われわれがプラトンの語法を検討して得た、「指向性・傾向性」という契機が「眼」の「犬」にたいする関係には認められない、ということである。ここから逆に、プロティノスの“ἡλιοειδής”にも、この副次的な意味契機が加味されていることが窺われる。プラトンが視覚を“ἡλιοειδής”と述定した際には、眼の発生と機能の観点からこの意味契機がそこに含意されていたが、プロティノスにおいては少々事情を異にしている。

われわれはこれまで、あるものが、その存在と機能を負っている原因者へと自らを関係づけてゆく性質にたいして

「指向性・傾向性」という概念を与えてきた。なるほどこのような指向性を眼は（例えば）犬にたいしては持ち得ない。しかし、プロティノスは、「眼は φωτοειδής であるから光や同じく光である色彩に向ってゆく」（II.4,5,10-11）[7]とは言いながらも、眼が太陽を見ることを希求していると言明しているわけでもない。「指向性・傾向性」という概念をここで再考する必要が出てくる。そこで、今一度『自然、観照、一者について』最終章における知性の "ἀγαθοειδής" 性についての言及に戻る。先の引用では、知性が善（一者）の観照即ち善への指向性をもったはたらきを通じてそこから形相を受け容れる、ということは、知性が「完成する（τελειοῦν）」ことであった。これに先立つ所でプロティノスは、「視覚のばあいには、感覚対象によって充足され、一種の完成の状態に達するのに対して、知性という視覚のばあいには、これを充足させるものは善なのである（τῇ μὲν οὖν ὁράσει ἡ πλήρωσις παρὰ τοῦ αἰσθητοῦ καὶ ἡ οἷον τελείωσις, τῇ δὲ τοῦ νοῦ ὄψει τὸ ἀγαθὸν τὸ πληροῦν.）」（III.8,11,6-8）とも述べている。そこで、ここでの議論を、同じく "ἀγαθοειδής" という言葉を用いている『美について』の問題の箇所にあてはめるならば、眼ないし視覚の（最高の）「充足状態（πλήρωσις）」ないしは「完成状態（τελείωσις）」が太陽を見ることによってもたらされると言いうるであろう。つまり、眼が太陽にもつ関係とはこのような眼の本性にほかならない。

このように、プロティノスの "ἡλιοειδής" 概念は、第一義的には眼が完全に「明順応」した状態を言い表し、それは、アリストテレスの感覚論における感覚器官の形相受容説ならびにプラトンの "ἡλιοειδής" の持つ「太陽への指向性」という概念に依拠している。ただし、プラトンにおいては「本性上の指向性」と相即不離の関係をなしていた、眼の太陽に対する「発生上」の依存関係という契機は、ゲーテが四行詩に改作した箇所から直接に析出されるわけではない。

註

（＊ここに掲載する小論は、もとゲーテについての研究論文の一節をなしていたものである。その研究論文の主題は、ゲーテの四行詩「目が太陽のようでなかったならば…」の成立史と思想的背景の解明であった。この論文は日本ゲーテ協会の論文公募に応じて同協会に投稿したものであるが、この度、平成七年度中に刊行される協会機関誌『ゲーテ年鑑』第三十七巻に改めて寄稿するにあたって紙幅の制約から、一部を削除せざるをえなくなった。以下の小論はこの部分に加筆・訂正したものと、新たに起稿した序から構成されている。）

（1）“-ειδής”と“-ωδής”というふたつの接尾辞は、プラトンの時代にはすでにほとんど同義に使用されていたが、両者はその起源を異にしている。前者は“εἶδος”から派生し、後者は“ὄζειν”（匂う）に由来する。この派生の相違がもっとも如実に現れるのは、副詞“εὖ”との結合においてであろう。“εὐειδής”とは「よいかたちをした」ないし「見目よい」という意味であり、“εὐώδης”とは「香りよい」という意味である。Herbert Weir Smyth, Gree Grammar, Cambridge (Massachusetts) ²1984 (1920), p.254, § 898a参照。

（2）その他、たとえば“τραγοειδής”（『クラチュロス』408d2）、“σκιοειδῆ φαντάσματα”（『ファイドン』81d2）、“τὴς […] σαρκοειδοῦς φύσεως λέμμα”（『ティマイオス』75e8 - 76a1）等。

（3）ホメロスの叙事詩においては、プリアモス、テレマコス、アレクサンドロスが“θεοειδής”と形容されている。

（4）ここでは、たんに「眼の太陽にたいする関係」のみならず、眼の太陽への指向性が問題になっている。接尾辞“-ειδής”を含む形容詞が、「…に向けられた」ないし「…への傾向性を持った」という意味で、対格支配の前置詞“πρός”と密接に関係づけられて使用されている例として『国家』第八巻の“θυμοειδής”を挙げることができよう。“θυμοειδεῖς […] τοὺς πρὸς πόλεμον μᾶλλον πεφυκότα ἢ πρὸς εἰρήνην”（547e3 - 548a1）また、“τὸ θυμοειδὲς οὐ πρὸς τὸ κρατεῖν μέντοι φαμὲν καὶ νικᾶν καὶ εὐδοκιμεῖν ἀεὶ ὅλον ὁρμῆσαι”（第九巻 581a1-10）。もっともここに挙げたふたつの例において指向されるのは、“ἡλιοειδής”の場合とは異なり、接尾辞“-ειδής”をつけた“θυμός”それ自体ではない。

（5）425b23-24 参照。なお、本文中の翻訳は、山本光雄訳、『霊魂論』（『アリストテレス全集』第六巻、岩波書店、一九六八年）、八〇頁を参照した。

（6）田之頭安彦訳、『自然、観照、一者について』（『プロティノス全集』第二巻、中央公論社、一九八七年）、四五三頁。

（7）『自然、観照、一者について』、同、四五二頁。